



医療法人 澄心会 豊橋ハートセンター

1999年、「患者様に優しく、温かい真心のこもった医療」を理念に掲げ愛知県豊橋市に開設。24時間救命救急体制を備えた循環器専門病院。年間約5,000例の心臓カテーテル検査・治療・手術を行い、県内はもとより、全国、海外からも患者様が訪れる。2008年に系列病院となる名古屋ハートセンター、2009年に岐阜ハートセンターを開設。

〒441-8530 愛知県豊橋市大山町五分取21-1
TEL.0532-37-3377(代表)
<http://heart-center.or.jp/>



名古屋ハートセンターで稼働している、血管造影システム「BRANSIST safire」



脈形成術(PCI)が用いられる。外科的手術に比べ患者様の負担が少なく、効果も得られやすいPCIは、長年に渡る技術とデバイスの進歩により、一般的な治療となっている。

鈴木院長の専門もPCI。1983年から、延べ1万例を超えるPCIを手がけたスペシャリストだ。その卓越した技術に対する評価は高く、遠くは海外からも豊橋ハートセンターの治療を求め、

まずその温かさに驚かされる。医師はもとより、すべてのスタッフが明るく患者様に「こんにちは」と声をかけ、手を

豊橋ハートセンターを訪れた人は、

ホテルマンに負けるな

「ホスピタル(Hospital=病院)」の語源は、ラテン語の「Hospes」。旅人客」を意味する言葉だ。「ホテル」「ホスピタリティ」の語源も同じ。病んだ人、疲れた人を暖かく迎えるという思想が、言葉の底流に流れている。

「ホスピタル(Hospital=病院)」の語源は、ラテン語の「Hospes」。

添えて案内する。「患者様に優しく、温かい真心のこもった医療」という同院のスローガンは、決してただのお題目ではない。

「『ホテルマンに負けちゃいかん』とスタッフにはいつも言っています」と言うのは、同院の鈴木孝彦院長。

「病院は、病んだ人が来られるところ。体が弱れば、心も沈むもの。それなのに、声をかけられることもなかったら、疎外感を感じられてしまうでしょう。病院にはホテル以上のホスピタリティが必要なんです。もともと、病院だろうとホテ

足を運ぶ患者様も多くいるという。

高い技術を広く共有

院長は、PCIなどの診断・治療の様子をライブ中継して、医師、技師らの技術向上を目指すライブデモンストレーションCCT(complex catheter therapeutics)の主宰者でもある。

「ただ技術を披露するだけでなく、お互いがお互いの技術を相互批評して、研鑽する場を作りたい」(鈴木院長)との考えから同調する医師らと始めた学会で、循環器内科に関わる臨床家たちの貴重な情報交換の場となっている。

その高い技術に加えて、豊橋ハートセンターでは、カテーテル検査・治療後に患者様をケアする専用の処置室を院内にもうけた。従来なら2〜3日も要していたカテーテル検査は外来で、カテーテル治療は一泊二日で可能にする体制も整えている。

「カテーテルのあとは、出血やアレレルギー発作などを起こす恐れもあります。それに即座に対応するためには、通常の病室では不可能です。医療費削減のためにも、質の高い医療を提供するためにも、率先して作りました」と鈴木院長は強調する。

医療の質を高めるチーム医療

もちろん、優れた医療は、施設個人の

ルだろうと、会った人に明るく声をかけることは、ふつうのことだと思いませんか」と、笑う。

循環器内科のリズム

鈴木院長は、循環器内科の医師として、16年間国立病院に勤務。副院長まで務めたが、いまから10年前、より良い医療を目指し循環器専門病院豊橋ハートセンターを立ち上げた。

「循環器内科で扱う心疾患は、他の病気に比べて一刻を争う事態になることが多い。また入院が必要となる基準や、患者様の心理状態も、他の診療科とは異なります。総合病院では他の診療科とリズムが違うので、同じ組織のなかにあると、どうしても限界が出てきてしまう。患者様のことを思えば、やはり専門の施設で対応するべきだろうと考えたんです」(鈴木院長)。

循環器の病氣「虚血性心疾患」は血管の内側にプラークと呼ばれるおこゆのような隆起がたまっていくことで起こる。プラークは、長い時間をかけてだんだん血管内の血の通り道を狭め、その結果、心臓に十分な血液が供給されなくなってしまう。治療は、薬を使って症状の改善をはかる内科的治療、開胸して狭くなった血管のバイパス手術をする外科的治療、そして血管内にカテーテルという細い管を通して、バルーンやステントと呼ばれるデバイスを使って狭くなった血管を広げる「経皮的冠動

力だけで実現できるものではない。

「PCIは、医師、看護師、技師など、多くのスタッフの連携が必要なチーム医療です。スタッフの待遇改善はもとより、各人の技術向上、コミュニケーションの強化に細心の注意を払っています」(鈴木院長)。

この充実した体制が、カテーテル検査を年間約3000例、PCIなどの治療を約1300例、外科手術を300例という日本有数の症例実績を実現し、その蓄積が、さらなるスタッフの技術向上に結びついている。

昨年から今年にかけて、同じコンセプトからなる循環器領域の専門病院「名古屋ハートセンター」「岐阜ハートセンター」を相次いで開設。名古屋ハートセンターでは、島津の血管造影システム「BRANSIST safire」も稼働している。

鈴木院長は、名古屋、岐阜両院の理事長も兼ねることになったが、豊橋ハートセンターの院長にとどまり、指揮をとり、なおかつ臨床医として治療にも一層力を入れている。

「名古屋、岐阜ともにスタッフにも恵まれ、最新の設備が整ったいい病院ができました。その分、豊橋も負けないようにがんばらない」と腕をまくる鈴木院長。

技術を尽くし、心を尽くす。理想とも言える医療を実践する同院。だが、鈴木院長は力を込めてこう言う。「ただ患者様の幸せを考えているだけ。ふつうのことですよ」。